

■巻頭言 教育現場に役立つ研究を

筑波大学附属学校教育局教育長

宮本 信也

特別支援教育の対象となる主な発達障害としては、自閉症、ADHD、学習障害があげられています。診断名で対象を限定することは分かりやすいのですが、そこには、教育現場にとっては無視できない問題があるように感じています。それは、発達障害とは診断・判断はされないが、支援を必要としている子どもたちが支援の対象になりにくいという問題です。自閉症やADHDでは、それぞれに特有の発達特性が一定のセットとなって見られます。しかし、そうした発達障害に特有の特性の一部だけが見られる子どもたちがいます。こうした子どもたちは、発達障害の診断・判断がされることはありませんが、実際には、持っている特性を背景とした問題には特別の支援が必要なことは少なくないのです。この問題へ対処するためには、医学の診断名にこだわらず、子どもたちが抱えている学習や生活上の困難さに目を向け、困っている状態を適切に評価し、必要な対応を行うという方法論の構築が必要となります。特別支援教育研究センターはリサーチユニットになりますが、全国の教育現場に貢献するそうした研究を進めていただきたいと願っています。



新たな一歩へ

筑波大学特別支援教育研究センター長

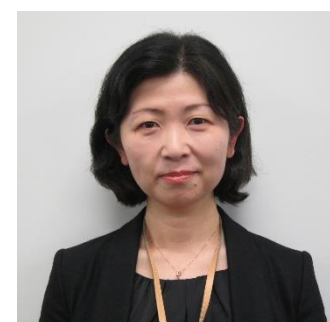
岡 典子

特別支援教育研究センターは、2018年3月末日を以て学内センターとしての位置づけをいったん終えることになりました。本センターは2004年の開設以来、国内外の特別支援教育を牽引すべく、さまざまな研究活動や事業を展開してきました。これまでセンターを支えてくださった人間系や各附属特別支援学校をはじめ学内の教職員の方々、センターの事業にご理解とお力添えをいただいた全国の特別支援教育関係者の皆様に、深く御礼を申し上げます。

本センターの運営に携わってきた一員として、今回の改組にはいろいろと複雑な思いもあります。けれども、ひとつ明確に言えることは、私たちはこれを機に、センターが掲げた理想の旗を降ろすのではなく、むしろいっそう邁進していかなければならないということです。名称や学内での位置づけは変わっても、附属校を含む本学が日本の、あるいは世界の特別支援教育に対して果たすべき役割・・・研究、実践、さらには種々の事業を先導するという使命に変わりはありません。

障害のある子どもたちのより良い未来のために、すべての関係者が手を携え、次の一歩をしるしていきましょう。

これまで、本当にありがとうございました。そして、引き続きどうぞよろしくお願いいたします。



■センター主催3月セミナー報告

3月26日（月）にセンター主催セミナーが筑波大学東京キャンパス文京校舎で開催され、79名の先生方にご参加いただきました。

筑波大学特別支援教育研究センター事業報告：平成29年度のJICA委託事業と5附属連絡会議ならびに教材・指導法データベースの報告を行いました。JICA事業については、研修内容、各附属特別支援学校の参観や教材・指導法データベースに関わる研修の様子を報告しました。5附属連絡会議ならびに教材・指導法データベースについては、データベースの充実のために行ったデータベースフォームの改善、データベース学習会の成果、パンフレット（教材集）の作成について報告しました。パンフレットの作成については、JICA事業での活用に向け、英語版の作成にも取り組みました。これは、各国の事情を考慮し、Web環境の無い所でも情報が伝えられ、少しでも教材を紹介できるようにと作成したものです。



第1部 筑波大学附属特別支援学校間連携研究報告：今年度は2件の連携研究が行われ、その報告がありました。濱田律子先生と佐藤幸子先生からは、重複障害児教育と乳幼児段階の聴覚障害教育との共通性を探り、実践に生かすことを目的として、2年間にわたって取り組まれた研究の報告がありました。相互に授業参観と情報交換を繰り返した成果として、コミュニケーションを大切に育てることで、信頼関係が生まれ、心を育てることにつながることで、聴覚障害教育で行われている母親支援の考え方は重度重複障害児への関わりにおいても大切であることが報告されました。



古山貴仁先生と加藤慎一先生からは、聴覚障害児と肢体不自由児の算数・数学における困難さの類似点や相違点を整理し、実践を通して効果的な指導法を探ることを目的とした研究の報告がありました。類似する困難さとして、手続き的知識の獲得とその利用が優先される傾向にあることが挙げられ、その解決に向けた実践の必要性が示唆されるとの報告がなされました。



平成29年度 筑波大学附属特別支援学校間連携研究テーマならびに研究者

聴覚特別支援学校幼稚部及び肢体不自由特別支援学校小学部重複学級の実践から、教育の可能性を探る	筑波大学附属桐が丘特別支援学校 筑波大学附属聴覚特別支援学校	濱田 律子 佐藤 幸子
抽象的思考に難しさのある聴覚障害児・肢体不自由児の算数・数学科の指導法の研究	筑波大学附属桐が丘特別支援学校 筑波大学附属聴覚特別支援学校	古山 貴仁 加藤 慎一

第2部 「特別支援教育の今後を語る」：筑波大学特別支援教育研究センターは、筑波大学人間系障害科学域と5つの附属特別支援学校の豊かな研究・実践に関する資源を基に、特別支援教育の発展に資する研究拠点としての役割を担って参りましたが、これからの特別支援教育の発展のためには、研究組織である大学と実践の場である附属特別支援学校との連携に基づく事業や研究・実践の在り方について改めて考えることが必要です。そこで、大学と附属特別支援学校のそれぞれの立場から話題を提供していただき議論を深める場にしたいと考えました。

大学からは、川間健之介先生、米田宏樹先生に、附属特別支援学校からは、根本文雄先生、雷坂浩之先生にそれぞれ話題提供をしていただきました。

附属桐が丘特別支援学校長を務められた川間先生は、大学と附属学校の両方の立場から見た連携のあり方についてお話しいただき、附属学校が社会の中でどれだけ必要な学校と認知してもらえるかといった課題が提示されました。

米田先生は、本センターが担ってきた研究機能を引き継ぎ、大学の特別支援教育研究機能の構想についてお話がありました。附属学校との連携状況のデータを基に研究成果のアピールの必要性について述べられました。

根本先生は、国立附属学校にはモデル校としての役割があり、大学や地域との連携、地域や全国への研究成果の還元が求められていることを挙げられました。また、附属大塚特別支援学校の取り組みを紹介しながら5つの附属特別支援学校が連携して取り組むことの大切さを述べられました。

雷坂先生は、本センター設立当時のセンター教諭であられたお立場から、これまでのセンターの役割と機能について述べられ、センターの機能と理念の継承の必要性を強調されました。

これらの話題を踏まえ、京都教育大学の佐藤克敏先生にお話をいただきました。佐藤先生からは、筑波大学（附属学校を含む）の規模の大きさ、スタッフ数の多さは大きなメリットであることを踏まえた上で、10年後、20年後のことを見据え、今何を考えておく必要があるかといった問題が提起されました。10年先は教育課程の一元化が進むと予測され、子どもたちにとって学ぶ場の選択肢が必要になることや地域との連携、専門性の明確化などが必要であることなどが話題提供をしていただいた4人の先生方からの回答でした。

時間の制約上、フロアからご発言いただくことはできなかったのですが、ご参加いただいた先生方からは、「大学と附属学校が果たすべき役割について考えさせられた」「10年後の特別支援教育のあり方や専門性について考えるきっかけになった」などの意見や感想をいただき、これからの特別支援教育について考える良い機会となりました。

■特別支援教育の今後

筑波大学特別支援教育研究センター初代センター長

齋藤 佐和

特別支援教育制度への移行から12年目に入ろうとしている。21世とともに始まった制度移行に関する議論の中で、特殊教育が蓄積してきた専門性を新しい制度にどう引き継ぐべきか常に考えざるを得なかったが、その中で「よこ」「たて」交差する視点が次第に定まってきた。「よこ」とは同時代的視点であり、障害概念の広がりや障害の多様性に対応していくインクルーシブ教育の考え方等であり、「たて」とは歴史的視点であり、蓄積されてきた先人の経験、対象となる子どもについての深い理解と本質的に必要な教育内容、方法などを引き継ぐ専門性の視点である。私たちは、今も今後も、この交差する視点を持ち続けることが必要であると思う。筑波大学特別支援教育研究センターは、附属障害教育学校5校を基盤に、正にこの視点に立ってセンター的機能を発揮すべく設置されたものである。今回、機能を学校教育局を中心に引き継いで幕を閉じるが、この交差する視点をもって、筑波大学ならではのセンター的機能が継承されていくことを強く期待したい。



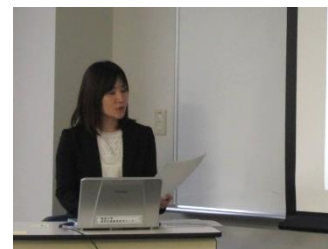
現職教員研修 研究成果報告会

研修成果報告会が3月8日（木）に行われ、2名の研修生が一年間取り組んだ課題研修テーマについて発表を行いました。研修生2名とも、附属特別支援学校での実習と筑波大学本学でのゼミ、2つのフィールドを持って精力的に研修を積んできました。発表には、参加者からいくつも質問や助言が出され、今後、研究をより深めるための課題や成果を実践に活かす上でのヒントを得る機会となりました。

＜平成 29 年度 課題研修テーマ＞

＊知的障害教育における S S T を取り入れた外国語の指導内容表の検討
～北海道における特別支援学校高等部への悉皆調査から～

＊知的障害を合わせ有する視覚障害児の「手でみる力」を育むために
～教材を活用した学習における手指運動の変容に着目して～



■現職教員研修 修了式

成果報告会終了後に修了式が行われ、来賓として、教育局から松本末男先生、人間系から佐島 毅先生がご出席下さいました。祝辞の中で、研究成果を研究として発表すること、一年間で得た事を現場に帰って同僚達に還元し貢献して欲しいこと、などの期待の言葉をいただきました。2名の研修生が、学校や地域のリーダーとして活躍されることを願って、修了式を終えました。



■現職教員研修 指導教員から一言

一年間指導にあたって下さった2名の先生方にメッセージを頂きました。



＊佐島 毅 先生＊

目の前のことに追われる日々を離れ、1年間かけて登り切った峠路の頂から今みる風景はどんなのでしょうか。頂にたつてしばし1年の歩みを振り返ったら、つぎの頂きに向けてゆっくり峠路を下りましょう。つぎの頂を昇りながら、これからの職業人生の礎となるこの1年の意味も鮮明になってきます。ご活躍を祈念しています。



＊柘植 雅義 先生＊

研修生の皆さん、修了おめでとうございます。研究に没頭した1年間、楽しかったと思います。でも、実はこれからの年月の方がもっと楽しいと思います。なぜなら、この1年間で、研究の面白さを知り、研究を進めるスキルを身に付けたからです。研究を味方に付けた教員人生がいよいよ始まるのです。この1年を遠い昔の思い出にしないように。

「筑波大学特別支援教育研究」第12巻 発行

3月に「筑波大学特別支援教育研究」第12巻が発行されましたので、お知らせいたします。

